

ヨシ笈田 国際児童青少年演劇デー メッセージ

僕は生まれてからずっと両親の真似をして大きくなりました。歩くこと、食べる
こと、喋ること、すべて両親の真似をして覚えたのです。そして物心がつい
てからは両親に連れられて劇場に行く事を覚えました。劇場は僕にとっては魔
法の国でした。劇場に入ってまず最初に目につくのが緞帳です。緞帳の後ろに
は何があるのかしらと大きな期待を持って開演を待ちました。遂にその幕が上
がると、その後ろには装置と照明と衣装で作りに上げられた夢の世界がありまし
た。それは現実そっくりに作り上げられたものであったり、現実ではありえな
いような風景が現れて来るのです。そこでは様々な姿をしたパフォーマーが 泣い
たり笑ったり、歌ったり踊ったり。そして幕間になると幕の向こう側でドンド
ン、ガタガタという音が聞こえて来ます。小さな劇場ですと客席の一番前の席
からそっと幕をめくって中を覗くことが出来ました。驚いた事に幕の向こう側
で大きな舞台装置が回ったり引っ込んだりして瞬く間に情景が変わって行くの
です。あとは家に帰って役者の真似をする事です。侍の役が一番好きでした。
眉を凛々しく描いて紙で作って、竹光の刀で友達と斬り合いをするのです。中学
一年ぐらいには舞台の模型まで作り始めました。回り舞台を作り装置を作って
豆電球で照明を作り、そして勿論舞台転換も、、、

それがエスカレートして遂にはプロフェッショナルの劇団に入りました。しかし日本では当時まだ、現代劇の演劇学校がなかったので仕方なく古典劇の師匠の所に行って、昔から伝わる演劇のテクニックを学びました。古典劇を学ぶと言う事は全て師匠のモノマネをして師匠そっくりになる様に努力する事です。

それでも現代劇を続けているうちにある日、思いもよらず brook のもとで仕事をするチャンスを得ました。最初のレッスンは今までに経験した事のない即興劇でした。即興劇をやれと言われても何をやっていいかわからなかったので日本で習った古典の動きを組み合わせで動き始めました。しかしある日、Brook から「もう日本の古典演劇の真似をするな」とダメが出ました。そう言われて僕はまるで大海に一人放り出された様な気持ちになりました。頼るものが何もなくて、ただあちこちを漂う難破船のようでした。しかしその時、初めて創るという事を考え始めたのです。自分の仕事は単に古典演劇の様に過去にあったものを再現するのではなく、自分独自の表現を創り出す事だと気づきました。そして創るという事は神様の様に無から有を生じる事ではなく以前にあったものを模倣しそれを乗り越える事なのです。浮世絵に影響されたゴッホ、アフリカ芸術から自分独特の絵を創り出したピカソ、漢字からヒントを得たミロ。すべて既に存在したもののからデヴェロップされたものです。

僕のたどった道のりも多分同じだったと思います。観たり聴いたりした演劇の

真似をして、それから抜け出そうと努力した人生でした。そしてそれが演劇を乗り越えて、いかに生きるかという事に繋がって行ったのです。

ヨシ 笈田

1933年兵庫県生まれ。文学座、劇団四季を経て、1970年にピーター・ブルックが設立した国際演劇研究センター（CIRT）に参加。これを機に拠点をパリに移す。75年、ヨシ・アンド・カンパニーを設立。俳優のみならず演出家としても演劇やオペラで活躍する一方、ヨーロッパ、アメリカ、日本の映画にも多数出演している。主な出演映画作品に『あつもの』『最後の忠臣蔵』『沈黙—サイレンス—』『ラストレシピ～麒麟の舌の記憶～』など。舞台作品には『春琴』『豊穰の海』などがある。著書「俳優漂流」（1989年初版）は17ヵ国語に翻訳され、世界中の俳優の“バイブル”と評されている。1992年にフランス芸術文化勲章シュヴァリエ、2007年に同オフィシエ、13年に同コマンドゥールをフランス政府から受勲。